

倭漢朗詠抄解

302

243

6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



302  
243

10

倭漢朗詠抄解說

# 倭漢朗詠抄解説

小林 静 雄

留春々不住。春歸人寂漠。厭風々不定。風起花蕭索。白



【出典】白樂天の「落花」といふ詩の一節である。原詩は「白香山詩後集」卷二に収録せられて居る。

【考異】尊圓親王本、私註本などには「留春春不駐」とある。「白香山詩集」には行成本と同じく住に作る。

【訓讀】春を留むるに春住まらず。春歸つて人寂漠たり。風を厭ふに風定まらず。風起つて花蕭索たり。

【辭解】寂漠……寂寥に同じ。人のけはひのなくてシンとして居るさま。蕭索……蕭條に同じ。ものさびしきさまをいふ。

【大意】行く春を惜しんで留めようとしたが、春は心なく去つて行き、あたりには行樂の人も絶えてしまった。残

花を惜しんで風が吹かねばよいがと思つて居たが、俄かに風が吹いて来て、花をすつかり散らしてしまつた。目

に入る所のものすべて淋しからぬはない。

【参考】朗詠百首の中に、この詩句の心を詠んだ和歌がある。曰く、「留むれど春はとまらで歸りにき、いかゞはす

べき今日のさびしさ」。よく原詩句の心を得て居ると思ふ。

竹院君閑銷永日。花亭我醉送残春。白

【出典】白樂天の「酬皇甫賓客」といふ詩の一節である。原詩は「白香山詩後集」卷八に収録されて居る。



【訓讀】竹院に君閑にして永日を鎖す。花亭に我酔うて殘の春を送る。

【辭解】竹院……竹を植えたる屋敷。院は垣牆をめぐらしたる家をいふ。花亭……花の咲いた木のある小さな家。亭は小屋をいふ。

【大意】貴方は竹院にあつて心しづかに晩春の永き日を暮らして居られる。私は花亭にあつて酒を飲み、酔うて行く春を惜しんで居るといふ意味。上句は皇甫賓客の高風をたゞへ、下句は自分の俗情を謙したものである。

けふとのみはるをおもはぬとききたにもたつことやすきはなのかけかは 朝恒

【出典】古今和歌集卷二春下に收められて居る朝恒の歌である。詞書には「亭子院の歌合に春のはてのうた」とある。

【考異】行成本には「けふとのみ」とあるが、これは「けふのみ」との誤寫である。

【大意】春は今日かぎりと思はない時でさへ易々と立ち去ることの出来る花の蔭ではない、まして春は今日かぎりである今日は何としても花の下を立ち去る氣になれない。

【參考】新古今集卷三夏に收められて居る大僧正慈圓の「ちりはてゝ花のかけなき木のもとにたつことやすき夏衣かな」の歌は、この朝恒の歌を本歌としたものである。

五嶺蒼々雲往來。但憐大庾万株梅。誰言春色從東到。露暖南枝花始開。 菅三品

【出典】この詩は村上天皇の天曆年間に作られた坤元錄屏風の詩の一つである。即ち坤元錄に記された漢土の名所を屏風に畫いて、それに詩を題せしめられた。その中の一つに梅の名所として聞えた大庾嶺の畫があつた。この

詩は即ちその大庾嶺の畫に題したものである。

【訓讀】五嶺蒼々として雲往來す。但憐大庾万株の梅。誰か言ひし春色東より到ると。露暖かにして南枝花始めて開く。

【辭解】五嶺……大庾、治安、臨賀、桂陽、楊陽の五山をいふ。江西省と廣東省との界にある連山である。大庾……五嶺の一で、山中に梅樹が多く、その早咲きを以つて有名である。春色……普通には春の景色といふ意味に用ひられるが、こゝでは春の氣といふ意味である。

【大意】五嶺は蒼々と霞んで、雲が往來して居る。その中に大庾嶺のみは、もう梅が眞白に咲いて何とも言へぬ美しさである。春の色は東から來るとは誰が言ひはじめたことであらうか。實際は南側が陽氣が暖かで、南の枝が眞先に花咲くのであるから、正しくは春の色は南より來るといふべきであらう。

【參考】この詩は後代の文學に引用せられたことが少くない。宴曲「梅花」には「それ青陽の春を迎へては、南枝の初花先づ開け、仙方の雪にたぐへて、淺紅芬郁の色をます」とあり、同「聖廟瑞譽」には「誰か言ひし春の色東より到と、露暖かにこの南枝花はじめて開く」とある。また謡曲「龍虎」には「五嶺蒼々として雲往來す、たゞ憐れむ大庾萬株の梅、梢も殊に色深き、木蔭によれば心なき、身にもあはれは有明の云々」とあり、同「難波」には「誰か言ひし春の色は、東より來るといへども、南枝花始めて開く、こゝは所も西の海に、向ふ難波の春の夜の云々」とある。その外「高砂」・「熊野」などにも引用されて居る。

いにしとしねこしにうゑしわかやとのわかきのむめははなさきにけり 安倍廣庭

【出典】萬葉集卷八春雜歌の中に中納言安倍廣庭卿歌一首として「去年春伊許自而植之吾屋外之若樹梅者花咲爾家

理」とある。また拾遺和歌集卷十六雜春の中にも「題しらす 中納言安倍廣庭」として此の歌を載せて居る。朗詠集の編者は拾遺和歌集から採つたものと思はれる。

【考異】 行成本に「ねこじにうゑし」とあるのは「ねこじてうゑし」の誤寫である。拾遺和歌集は勿論、朗詠集の諸本にも、「ねこじて」とある。

【辭解】 ねこじて……根こぎにしての意。

【大意】 去年の春、根こぎにして來て來て自分の家の庭に植えた若木の梅が、今年はまだ美しく花咲いて居る。

わかせこにみせむとおもひしむめのはなそれともみえすゆきのふれ、は 赤人

【出典】 萬葉集卷八春雜歌の「山部赤人歌四首」の中に「吾勢子爾令見常念之梅花其十方不所見雪乃零有者」といふ一首がある。また後撰和歌集卷一春上に「題しらす 朗人しらす」として此の歌を載せて居る。

【辭解】 わがせこ……私の夫といふ意味。「せこ」は女が夫または兄を親しんで呼ぶ稱呼である。こゝでは無論夫をさしたものである。この歌は赤人が女の心になりかはつて詠んだものである。

【大意】 梅の花が美しく咲いたので、夫が來たらば、一所に眺めようと楽しみにして居たのに、あひにく雪が降つてしまつて、どれが梅の花やら判らないのは、まことに残念である。

世の中にたえて櫻のなかりせははるのこゝろはのとけからまし

【出典】 古今和歌集卷一春上に「渚の院にて櫻を見てよめる 在原業平朝臣」と詞書して此の歌を載せて居る。また伊勢物語に「昔、惟喬親王と申すみこおはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に宮ありけり。年ごと

の櫻の花盛には、その宮へなむおはしましけり。その時右馬頭なりける人を常に率ておはしましけり。時世へて久しくなりにたれば、その人の名忘れにけり。狩は懸にもせて酒を飲みつゝやまと歌にかゝれりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の櫻ことにおもしろし。その木の下におり居て、枝を折りてかざしにさして、上中下みな歌よみけり。馬頭なりける人の詠める。「世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし」となむ詠みたりける」と見えて居る。

【辭解】 たえて……一向に。絶對に。

【大意】 春は櫻の咲く頃なれば「もう咲きさうなものだ」と心を遣ひ、咲けば咲いたで「風でも咲かねばよいが」と心配し、散りそむれば又それを惜しんで心をつくすといふ風で、ほんに氣の休まる時とはない。もし櫻といふものが全くなかつたとしたら、さぞ春はノンビリとしたものだらうといふ意。歡樂を追ふ都會人が軽い疲勞を覺えて、それを詠んだ歌。

わがやとのはなみかてらにくる人はちりなむのちそ戀しかるへき 躬恒

【出典】 古今和歌集卷一春上に「櫻の花のさけりけるを見にまうできたりける人によみておくりける 躬恒」と詞書して此の歌を載せて居る。

【辭解】 はなみかてらに……花見のついでにといふ意味。

【大意】 私の家の櫻が咲いたので、その花を見ながらに私の家を訪れてくれる人があるが、その人々も花が散つてしまつたら恐らく訪ねて來てはくれまい。さうして一人ばつちになつてしまつたら、さぞかしその人々が戀しくて堪らないだらう。

みてのみや人にかたらむ山櫻てことにをりていへつとにせむ

素性

【出典】古今和歌集卷一春上に「山の櫻をみてよめる 素性法師」と詞書して、この歌を載せて居る。

【考異】古今和歌集には「人に語らん櫻花」となつて居る。

【辭解】いへつと……家へ持つて歸る苞直の意で、土産物をいふ。

【大意】この山櫻の美しさをたゞ見たばかりで人に語つてよいものか、さあ／＼皆さん、各自に一枝づゝ手折つて土産にしませう。

【参考】この歌は謡曲「雲林院」・「岡崎」・「花小沙」などに引用されて居る。但し引用の原據は古今和歌集らしい。

### 青苔地上銷殘雨。綠樹陰前逐晚涼。

白

【出典】白樂天の「池上逐涼」といふ詩の一節である。原詩は「白香山詩後集」卷十四に収録されて居る。

【訓讀】青苔の地上に殘雨を銷す。綠樹の陰の前に晚涼を逐ふ。

【辭解】殘雨……雨後の溜り水。晚涼……夕涼みのこと。

【大意】青い苔の一面に生えた地の上に雨の名残の溜り水が吸ひこまれて消えてしまつた。緑こき夏木立のほとりには夕涼みをして居る人がある。

【参考】実曲「納涼」の一節に「青苔の地の上、綠樹の陰の前、晚涼興を催す砌、古集の詩を吟す也。」とある。この詩句を引用したものである。

### 露簾清熒迎夜滑。風襟蕭灑先秋涼。

白

【出典】白樂天の「池上夜境」の詩の一節である。原詩は「白香山詩後集」卷二に収録されて居る。

【訓讀】露簾清熒として夜を迎へて滑らかなり。風襟蕭灑として秋に先だつて涼し。

【辭解】露簾……簾は竹席と云つて青竹を編んで製つた簾のやうなものである。夏時涼をとるために用ゐる。露熒といふのは夜露の置いた竹席の意味である。清熒……白香山詩集には清瑩とある。清くかゝやいて涼しげなことをいふ。風襟……涼風をうけて爽やかな感じのする單衣といふ意味である。蕭灑……冷やかに身にしみむことをいふ。風襟……涼風をうけて爽やかな感じのする單衣といふ意味である。蕭灑……冷やかに身にしみむこと。

【大意】夜になると竹簾の上にシットリと夜露が下りて、清らかにかゝやき、常より一層なめらかに見ゆる。また涼風をうけて單衣の肌ざりは非常に爽やかで、また秋にもならないのに、涼しさが身にしみじみと感じられる。

### 不<sub>三</sub>是禪房無<sub>二</sub>熱到。但能心靜即身涼。

白

【出典】白樂天の「苦熱題恒寂師禪室」といふ詩の一節である。即ち人々が暑いく／＼と言つて大騒ぎをして居る中に、恒寂禪師が禪室を出でず寂然と行ひすまして居られるのを讃歎したものである。原詩は「白香山詩前集」卷十五に収録されて居る。

【訓讀】是は禪房に熱の到ること無きにあらず。但能く心靜かなれば即ち身も涼し。

【辭解】禪房……禪室といふに同じ。禪宗の僧侶の蒲居する部屋をいふ。

【大意】何も恒寂禪師の室だからとて暑熱の到り及ばない譯では決してない。たゞ禪師の心境が閑靜であるから、身體自ら涼しいものであらう。

班婕妤團雪之扇。代岸風兮長忘。燕昭王招涼之珠。當沙月兮自得。 匡衡

【出典】 大江匡衡の「夏夜守庚申侍清涼殿同賦避暑對水石序」の一節である。原文は本朝文粹卷八に收められて居る。

【訓讀】 班婕妤が團雪の扇、岸風に代へて長く忘れ、燕の昭王招涼の珠、沙月に當つて自ら得たり。

【辭解】 班婕妤……漢の成帝の寵妃。婕妤といふのは女官の官名である。この人が君寵の衰へたことを慨いて、わが身の上を秋扇に喩へて五言十句の詩を作つた。即ち文選の卷二十七に收められて居る「怨歌行」がそれである。その詩は「新裂齊紈素。皎潔如霜雪。裁爲合歡扇。團々似明月。出入君懷袖。動搖微風發。常恐秋節至。涼風奪炎熱。弃捐篋箱中。恩情中道絕。」といふのである。この班婕妤の悲戀の物語を舞臺を日本に移して世話化したのが即ち謡曲「班女」である。團雪之扇……團きこと月の如く、皎きこと雪の如くなる扇といふ意味の名稱である。班婕妤が愛玩した扇として傳へられて居る。班婕妤がさういふ扇を愛玩したことは正史には見えないが、先に記した「怨歌行」から聯想して、さういふ傳説が生れたものであらう。燕昭王……周の末に燕の國の王となつた人。招涼之珠……燕の昭王が秘藏したと傳へられる珠玉。この珠を懷中にすれば、自ら暑熱を感じないといふので、さう名づけられたものであるといふ。

【大意】 水岸に吹きそよぐ風の涼しさには、かの團雪の扇も要なく、また水石に映る月影を見ては、さながら招涼の珠を得たかと思はれる。

【參考】 宴曲「納涼」に「鳴扇の風をも、岸風に代てや忘るらん」とあり、同「永福寺勝景」には「岸風に扇をも忘れぬべきは、先づ目にかゝる釣殿、歸るさも更に急がれず」とある。また謡曲「班女」に「秋風冷やかに吹き落ちて團雪の扇も雪なれば、名を聞くも冷しくて云々」とあるが、何れも此の句を原據としたものである。なほ

東關紀行その他にも引用されて居る。

相思夕上松臺立。蝨思蟬聲滿耳秋。 白

【出典】 白樂天の「題李十一東亭」といふ詩の一節である。原詩は「白香山詩前集」の卷十三に收められて居る。

【訓讀】 相思うて夕に松臺に上りて立てれば、蝨の思、蟬の聲耳に滿ちて秋なり。

【辭解】 松臺……ほとりに松を植えた臺の意味である。李十一の東亭に於ける臺である。蟬聲……恐らく蝨の聲であらう。

【大意】 秋の夕暮、鄜州に在る友人の李十一の事を思ひ遣つて、その留守宅である東亭を訪れ、ほとりに松を植えた臺に上つて佇んで居ると、蝨や蟬の聲が物思はしげに聞えて來て、益々友人が慕はしくなり、秋の悲しさがヒシ／＼と身に迫つて來る。

【參考】 新續古今集の中に此の詩句の心を詠じた和歌が載せられて居る。曰く、「蟬の聲虫のうらみぞ聞ゆる松のうてなの秋のゆふぐれ。」作者は前中納言定嗣である。

望山幽月猶藏影。聽砌飛泉轉倍聲。 菅三品

【出典】 菅原文時の「法輪寺口號」の一節である。法輪寺は嵯峨嵐山の古刹である。

【訓讀】 山を望めば幽月なほ影を藏す。砌に聽けば飛泉うたゝ聲を倍す。

【辭解】 幽月……月の光のまだかすかなのを云ふ。砌……階の下の甃の所をいふ。飛泉……瀧のこと。こゝでは恐らく戸難瀧の瀧をさすものと思はれる。轉……うたゝ。いよ／＼、ますますといふ意味。



【大意】 山を望めば月はまだ光も淡く山の端を離れやらで居る。砌に立つて聽いて居ると、瀟の音が夜に入るに随つて益々音高く響いて来る。

をくらやまふもとのゝへのはなすゝきほのかにみゆるあきのゆふくれ

【出典】 貫之の歌と傳へられて居るが、眞偽は不明である。新古今和歌集卷四秋上には「題しらす 讀人不知」として此の歌を載せて居る。

【辭解】 ほのかにみゆる……「はなすゝき」の「ほ」を「ほのかに」の「ほ」に懸けて居る。

【大意】 秋の夕暮に小倉山の麓の野邊を見わたすと、ほのぐらい夕闇の中に、一面の花薄がぼんやりと霞んで見える。

ときはなるまつのみとりもはるくれはいまひとしほのいろまさりけり 源宗千

【出典】 古今和歌集卷一春上に「寛平の御時きさいの宮の歌合による 源宗千朝臣」と詞書して此の歌を載せて居る。

【辭解】 ときは……常葉の轉。松柏などの葉の四季を通じて緑色であつて、葉がへをしなないことをいふ。

【大意】 四季を通じて緑色である松の葉色も春が来ると一段と色が鮮やかになる。

われみてもひさしくなりぬすみよしのきしのひめまついくよへぬらむ

【出典】 古今和歌集卷十七雜上に「題しらす 讀人しらす」として此の歌を載せて居る。また伊勢物語には「昔、帝

住吉に行幸し給ひけり。『われ見てもひさしくなりぬ住吉の岸のひめ松いく代へぬらむ』御神現形したまひて、『むつまじと君は知らなみ瑞垣の久しき世よりいはひそめてき』と見えて居る。

【考異】 古今集には「わが見てもひさしくなりぬすみよしのえの」となつて居る。いづれにしても意味に變りはない。

【辭解】 すみよし……攝津の國の地名。こゝに住吉明神が鎮座します。今の大阪市住吉區住吉町の住吉神社が即ち其れである。境内に巨松が多い。昔は此處が海邊であつたのであるが、今では海岸線が移動して、海からは遙かに離れて居る。ひめまつ……姿の優しい松を美めていふ名稱。必ずしも雌松のみをいふのではない。恰かも小松を雌雄の別なく姫小松と美稱するのと同じことである。

【大意】 住吉の岸の姫松は幾世を経て居るのであらう。昔、自分が初めて此の松を見た時からでも随分な年數になるのだが、その時でさへ既に立派な木であつたのだから、餘程古くからある木に違ひない。

【参考】 謡曲「高砂」の後シテの出の謡に此の歌が引用せられて居る。

あまくたるあらひとかみのおひあひをおもへはひさしすみよしの松 安法法師

【出典】 拾遺和歌集卷十神樂歌の中に「住吉に詣でて 安法法師」と詞書して此の歌を載せて居る。

【考異】 拾遺集には「あらひとかみのおひあひを」とある。行成本の「おひあひを」は誤寫である。

【辭解】 あらひとがみ……現の人にして神なるものをいふ。故に天皇を現人神と申し上げるのである。住吉明神は現人神ではないが、その神威嚴然として在りますが如くであるといふので、「あまくたるあらひとがみ」といつたのであらう。あひあひ……相生の義で、相共に生ずるをいふ。

【大意】 住吉の松は住吉明神が此の土に天降られた時に、神木として此處に生じたものであるから、思へば久しい



年月を経た木である。

【参考】「高砂」の能の間狂言の詞に引用されて居る。

煙葉蒙籠侵夜色。風枝蕭颯欲秋聲。白

【出典】白樂天の「和令狐相公栽竹」の詩の一節である。原詩は「白香山詩後集」卷九に「和汴州令狐相公新於郡内栽竹百竿拆壁開軒旦夕對詼偶題七言五韻」と題して収録されて居る。

【訓讀】煙葉蒙籠として夜を侵す色。風枝蕭颯として秋になんかなむとする聲。

【辭解】煙葉……うち煙りて見ゆる竹の葉。蒙籠……葉の生ひ茂りて薄暗きをいふ。風枝……風に吹かれ居る竹の枝。蕭颯……風聲のすさまじきをいふ。

【大意】竹の葉のうち煙れるさまは蒙籠として夜色の蒼然たるが如く、その枝の風にさやげる音は蕭颯として早くも秋の訪れたるを知らせる。

【参考】謡曲「龍虎」に「さても不思議や山人の、教へのまゝに山路を分け、竹林を遙に見渡せば、煙葉蒙籠として夜の色を侵し、風枝蕭颯として、秋の聲よりすさまじや」とある。

阮籍嘯場人歩月。子猷看處鳥栖煙。章孝標

【出典】章孝標の「竹枝詞」の一節である。

【訓讀】阮籍が嘯く場には人月に歩む。子猷が看る處には鳥煙に栖む。

【辭解】阮籍……謂はゆる晋の竹林七賢の一人である。常に竹林に入つて酒を飲んで長嘯し、琴を弾じ、詩を吟

じて悠々自適の生涯を送つた。子猷……王徽之といった人。子猷は其の字である。晋の騎兵參軍であつたが、竹を愛したので有名である。ある時、空宅に寄居して、庭に竹を植えさせて、旦夕これを眺めて楽しんで居た。ある人が其の故を問うた時、子猷は竹を指して「何ぞ一日此の君なかるべけんや」と答へたといふ。

【大意】阮籍が嘯いて居た竹林のほとりには人が月影を踏んで歩いて居る。子猷が明暮ながめた、竹をうるた庭には鳥が煙葉の中に栖んで居る。

晋騎兵參軍王子猷。栽稱此君。唐太子賓客白樂天。愛爲吾友。篤茂

【出典】藤原篤茂の「修竹冬清序」の一節である。原文は「本朝文粹」卷十一に収録されて居る。

【訓讀】晋の騎兵參軍王子猷、栽て此の君と稱す。唐の太子の賓客白樂天、愛して吾が友と爲す。

【辭解】愛爲吾友……白居易の「池上竹下作」といふ詩に「水能性淡爲吾友。竹解心虛即我師。」とあるのを勘違ひして書いたものであらう。

【大意】晋の騎兵參軍だつた王子猷は竹を栽えて「何ぞ一日この君なるべけんや」と言ひ、唐の太子賓客だつた白樂天は竹を愛して「我が友なり」とした。

【参考】「枕草子」の百十八段に「五日ばかりに、月もなくいとくらき夜、「女房やさぶらひ給ふ」と、聲々していへば、「出でて見よ。例ならすいふは誰ぞ」と仰せらるれば、出で、「こは誰ぞ。おどろくしうきはやかなるは」といふに、物もいはで御簾をもたげてそよとさし入るゝは奥竹の枝なりけり。「おい。この君にこそ」といひたるを聞きて、「いざや、これ殿上に行きて語らむ」とて、中將、新中將、六位どもなどありけるはいぬ。頭の辨はとまり給ひて、「怪しくいぬる者などもかな。御前の竹を折りて歌よまむとしつるを、職にまわりて同

じくは女房など呼び出でてを」といひてきつるを、吳竹の名をいとくいはれて、いぬるこそをかしけれ。たれが教を知りて、人のなべて知るべきもあらぬ事をいふぞ」などの給へば、「竹の名とも知らぬものを、なまねたしとや思しつらむ」といへば、「まことぞ。え知らじ」などの給ふ。云々』とある。文中に頭の辨とあるのは行成卿である。

送笋未抽鳴鳳管。盤根纒點臥龍文。中書王

【出典】前中書王の「禁庭植竹」の詩の一節である。原詩は「江談抄」巻四に収録されて居る。

【訓讀】送笋未だ鳴鳳管を抽でず。盤根纒かに臥龍の文を點す。

【辭解】送笋……筍のこと。地を破つて送り出づるが如く生ずる故に送笋といふ。鳴鳳管……鳳凰の鳴く音に似たる妙音を發する筍といふ意味。筍の美稱。臥龍文……龍の臥して居るやうな形。

【大意】筍は勢ひよく生じたが、まだ鳳管を作るに足る筍を作すに至らず、たゞ竹根が蟠つて纒かに龍の臥せるが如き形を見せて居るのみである。

しくれふるおとはすれともくれただけのなとよともにもいろいろもかはらぬ

【出典】この歌は「古今六帖」には素性法師の作とし、「新古今和歌集」卷六冬歌には中納言兼輔の作として居る。いづれを是とすべきか俄かに斷定はし難い。

【考異】一本に「しくれするおとはすれとも」とある。いづれにしても意味に變りはない。

【辭解】くれだけ……淡竹の類。丈は數尺を出でず、葉は細く、庭に植えて賞翫する竹である。もと吳の國より渡

つたものであるといふので、この名がある。なとよとも……この「よ」は竹の「節」と「世」との二義を兼ねて居る。即ち「吳竹の葉の常に綠にして世の常の草木と共に色變ふることのなき」と「竹の葉の節と共に常に綠なる」とを懸けて言つたものである。

【大考】萬木千草いづれも時雨にあへば葉色が變るのに、吳竹のみは何故に時雨にあつても葉色が變らぬのであらうか。

嫌少人而踏高位鶴有乘軒。惡利口之覆邦家雀能穿屋。

【出典】賈島の「鳳爲王賦」の一節である。

【考異】行成本には「惡利口之覆家」とあつて「邦」の一字を脱して居る。恐らく筆寫の際の誤脱であらう。

【訓讀】嫌少人にして高位を踏むことを嫌ふ、鶴軒に乗ることあり。利口の邦家を覆すことを惡む、雀能く屋を穿つ。

【辭解】少人……小人に同じ。徳なきものをいふ。鶴有乘軒……軒といふのは大夫以上の身分の者の乗る車をいふ。昔、支那に暗愚なる君主があつて、鶴を愛して之れに高位を與へ、また軒に乗せしめた。然るに其の後、國に亂が起つた際、誰一人として此の君のために働く者もなく、遂に國が減びたといふ故事を踏まへて言つたものである。利口……辯口の巧みな者のこと。

【大意】嫌ふべきは徳のない者の高位を踏むことである。鶴が軒に乗るやうな状態になつては、國の運命も末である。また惡むべきは口まへの上手な者が政治に參與して遂には國を滅ぼすに至ることである。雀が能く屋根を突き破るやうなもので、この徒のなすことには油斷がならない。

同季陵之入胡但見異類。似屈原之在楚衆人皆醉。

【出典】皇甫曾の「鶴處雜群賦」の一節である。

【訓讀】季陵が胡に入つしに同じ、但だ異類をのみ見る。屈原が楚にありしに似たり、衆人皆醉へり。

【辭解】季陵……漢の武帝の時、軍を率ゐて匈奴を伐ち、利あらずして匈奴に降つた人である。胡……野蠻人をいふ。こゝでは匈奴のこと。屈原……楚の懷王を諫めて、その忌避にふれ、遂に江邊に放たれた人。

【大意】鶴が雞の群にまじつて居るのは、あだかも季陵が胡に降つた時、その周圍に居る者が悉く野蠻人であつたのと同じである。また屈原が楚の國にあつた時、彼を除く凡ての人間が皆醉へるが如くであつたのにも似て居る。

聲來枕上千年鶴。影落盃中五老峰。

【出典】白樂天の「題元八溪居」といふ詩の一節である。原詩は「白香山詩前集」の卷十六に収録されて居る。

【考異】「題元八溪居」とあるが、元八は元十八の誤りであると言はれて居る。「白香山詩前集」卷七の「題元十八溪亭」をも参照すると興味が深い。

【訓讀】聲は枕の上に来る千年の鶴、影は盃の中に落つ五老の峰。

【辭解】五老峰……廬山の中の一峰。「題元十八溪亭」の詩の原註に「亭在廬山東南。五老峰下。」とある。

【大意】千年の鶴を保つといふ鶴の聲は臥したる枕の上に聞え來り、五老峰の影は酒杯の中に映る。

【參考】この詩は謡曲「木賊」のキリに引用せられて居る。

秋水未鳴遊女佩。寒雲空滿望夫山。

賀蘭遂

【出典】賀蘭遂の「寄所思佳人」といふ詩の一節である。

【訓讀】秋の水は未だ遊女の佩を鳴らさず。寒雲は空しく望夫の山に滿てり。

【辭解】遊女……これは娼婦の意味ではなく漢水といふ川の神の名である。佩……おびものと訓ずる。支那の昔の服制で大帯につけ下げた飾りの玉をいふ。昔、鄭交甫といふ人が江漢のほとりて神女に逢ひ其の佩を與へられたといふ傳説が列仙傳に見えて居る。望夫山……昔、貞婦が國難に赴く夫を見送つて、山上に於いて立つたまゝ石と化したといふ傳説がある。望夫山とは即ちその山をいふのである。この傳説の石は今も武昌の北山にあるといふ。

【大意】秋の川には遊女の佩玉の響だにも聞えず、望夫山にはたゞ寒雲が滿ちて居るのみである。我が戀ふる人は未だ姿を見せてくれない。

翠黛紅閨万事之禮法雖異。舟中浪上一生之歡會是同。

以言

【出典】大江以言の「見遊女詩序」の一節である。原文は「本朝文粹」卷九に収録されて居る。

【考異】行成本には「翠黛紅閨」とあるが、これは勿論「翠帳紅閨」の誤寫である。

【訓讀】翠帳紅閨万事の禮法異なりと雖も、舟の中浪の上一生の歡會是れ同じ。

【辭解】翠帳紅閨……青き帳を垂れ、紅に飾れる寢室といふ意味。舟中浪上……昔、淀川は水陸の要地で、旅客の通行が頗る頻繁であつたので、川に舟を浮めて色を賣る女が澤山あつた。本句は其の遊女のことを賦したものである。

【大意】 淀川邊の遊女は、翠帳紅閨にかしづかれた貴族階級の女性とは禮法が萬事異つて居て、凡てあらぬ様ではあるが、然し舟の中、浪の上であつても、その樂しみは少しも變ることはない。

しらなみのよするなきさによをすくすあまのこなればやともさためす 海人詠

【出典】 不明。但し「新古今和歌集」卷十八雜歌下には「題しらす 讀人しらす」として此の歌を載せて居る。

【考異】 新古今集には「よする渚に世をつくす」となつて居る。

【大意】 私は海邊で世を過して居る海人の子ですから、何處と宿をも定めずに漂ひ歩くのでございますといふ意。

【参考】 「源氏物語」夕顔の卷に「盡させず隔て給へるつらさに、顯さじと思ひつるものを。今だに名のりし給へ。いとむくつけしとのたまへど、海士の子なればとて、さすがにうち解けぬ様、いとあいだれたり」とある。夕顔が源氏君の間に應へてたゞ「海士の子なれば」と言つた意味は「宿も定めぬ賤しい者でございます」といふことを婉曲に言つたものである。

水無反夕・流年涙。花豈重春暮齒粧。

尙齒會  
管三品

【出典】 安和三年三月十三日、大納言藤原在衛卿が催した尙齒會の折に菅原文時の詠じた詩の一節である。

【訓讀】 水反る夕なし流年の涙、花豈重ねて春ならむや暮齒の粧。

【辭解】 流年涙……水のやうに流れ去る年月を惜しみ悲しむ涙の意。暮齒……老齡といふに同じ。

【大意】 水は一たび流れ去つて復かへることがない。年月の過ぎ去るのも其れと同じで、昔は二度とかへつて來ない。それを思ふと、涙を禁じ得ない。花は一年に再び春に逢うて花咲くことがない。人生また斯くの如く、年老

いて再び青春に逢ふことは不可能である。それを思へば、そゞろに悲しくなる。

林霧校聲鶯不老。岸風論力柳猶強。

同

【出典】 これも同じく管三品の「尙齒會詩」の一節である。

【訓讀】 林霧に聲を校ぶれば鶯老いず。岸風に力を論すれば柳なほ強し。

【大意】 林の霧の中に鳴く老鶯の聲も自分の聲に比すれば遙かに若々しく、風のまに／＼靡いて居る岸の柳も自分の力の弱さに比すれば、まだ／＼強いとはいはねばならない。

醉對落花心自靜。眠思餘算淚先紅。

雅規

【出典】 菅原雅規の「尙齒會詩」の一節である。

【訓讀】 醉ひて落花に對へば心自ら靜なり。眠つて餘算を思へば涙先づ紅なり。

【辭解】 餘算……餘命といふに同じ。

【大意】 酒に酔うて花の散るのを眺めて居ると老の身をも忘れて心が自ら靜かであるが、夜半の寢覺に餘命の幾何もないのを思ひ出づると悲しさに堪えず血涙があふれて來る。

302  
243

和漢朗詠抄

行 成 卿 書  
光 悅 模 標  
解 說 附 二 冊

製 複 許 不

<p>昭和十一年四月一日印刷 昭和十一年四月五日發行</p>	<p>編輯發行 兼印刷者 合名會社 芸 艸 堂 出版部 京都市寺町二條南入</p>	<p>發行所 合名會社 芸 艸 堂</p>	<p>本店 京都市寺町二條南 支店 東京本郷湯島一ノ一</p>
------------------------------------	---	-----------------------	-------------------------------------

電話上二九〇番  
電話中央二五八番  
電話下谷三六〇〇番  
電話東京巴〇九四〇番

302  
243

終